

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 25 回 我社の借り入れ、いくらなら大丈夫？

「我社は、いくらまでの借入金ならば、安全でしょうか？」 クライアントからよくこの手の質問を受ける。毎日経営に苦勞している社長ならば、当然、常に気になるところである。健全な経営を実践するならば、企業の支払能力の範囲内で借入金の調達をしなければならぬ。この「安全な範囲内の借入金」、これを「借入限度額」と呼んでいる。

借入限度額...実際は、企業規模、業種・業態、戦略動向、等々により、一概に言い切ることはできないが、一般的な傾向として、いくつかの「モノサシ」がある。

資金繰り表を見れば分かるように、絶対的に安全な額は、現金ベースの「当期利益額 + 減価償却額」の範囲内である。でも、この範囲内での借入とは、投資的意味合いを持たない、ちょっとした運転資金の調達がせいぜいであろう。

もう少し多額の借入金を想定するのであれば、第一に、借入金が増える何倍あるかで判断する方法がある。短期と長期の借入金 + 割引手形を分子とし、分母に現金ベースの月平均売上高を置き、その倍率を出すというやり方。判断基準は、1.5 倍で良、3 倍は要注意、6 倍以上は危険といわれているが、概ね 1.2 ~ 2 倍というところが、ひとつの目安といえる。

第二のモノサシは、粗利益に対する利子負担率で見する方法がある。つまり、売上総利益対支払利息比率を算出し、この検討をするやり方である。ここで言う支払利息は、割引料を加え受取利息を差し引いた、実質支払利息のことである。これは低ければ低いほど良好と判断するが、ひとつのボーダーラインは、5%とされている。

そして第 3 のモノサシとしては、損益分岐点分析である。我社の損益分岐点を計算し、その分岐点を越えた利益売上高に対し限界利益率をかけ、その 30% を支払利息の限度として逆算しながら、借入金の限度額を算出する方法である。

いずれも前述した通り、個々の状況により若干の差異はある。しかし概ね一般的手法としての経験値であることは、間違いないだろう。

「あなたの事業・会社の借入金、大丈夫ですか？」

過大借入金で、その返済に苦慮している企業がどのくらいあるか、倒産の、ほとんどの原因がこの点にあること、改めて述べるまでもない。対策をとる前に、まずチェック。この「モノサシ」を使って自社の現状を正確に把握することである。そしてその具体的対応策は...是非 I K G に相談して頂きたい。想定できるあらゆる手段を駆使し、今だから、今だからこそできる方法を必ず見つけ出す、そんな意気込みで誠意をもって、ご相談に応じる所存である。